

英語表現に顕れた英語的発想

静岡大学教育学部 三浦 孝

1. 「英語学習は異文化理解」論

英語を学ぶということは、「英語ということばに生きること」です。英語教育の最終目標は、「実践的コミュニケーション能力の育成」ではありません。それは、いわば手段です。手段が目的化してゆくとき、生きることとはつながりません。英語教育を考えるということは、「英語を学ぶことによって生徒が生きているか」を問うことです。いや、その前に、教師自身が生きているかを問うことです。(中略) 日本語的思考という「単眼」に、英語的志向を加えて「複眼」にすることです。(松畑)

2. 「英語教育に文化学習不要」論

私はただでさえ時間の限られている英語の授業では、他の教科や場所でもやれることを一切省いて、英語の授業の中でしかできないことに、全精力を集中すべきだと思うのです。(中略) 何よりもまずしなければならないことは、近年文部省や各界の有識者が、英語教育の重要な柱の1つとして強調する「国際理解」はもちろんのこと、英米の文化や文学といったものすべてを、英語のクラスから追い出すことです。(鈴木孝夫)

3. 「英語教育に文化学習不可能」論

World Englishes が進行すれば、英語表現も当然、土着した現地の文化に依拠することになる。

One must be familiar with the context in which the utterances are produced—not merely the immediate conversational context but the broader sociocultural context underlying it. It is not reasonable to think that English, or any pluricentric language, can in itself have such force as to establish identical situational interpretations across cultural boundaries. (Kachru and Nelson)

4. 調査：現行中学校英語検定教科書は対人的文化表現をどう扱っているか

(表1：今回調査した英語表現と、その根底にある対人的文化)

根底の発想	場面	英語
①積極的言語表明の文化(話し手も聞き手も言葉を尽くして表現する責任を求める文化)	➤ 相手の話を理解できない時	"I beg your pardon?" "Sorry, I don't quite understand you."
	➤ 謝罪する時	"Sorry about the other day. I was a bit upset."
	➤ 相手への気持を明白に言語表明	"I will miss you."
②英語は言語バレーボール ¹ を尊ぶ	➤ 会話を積極的に続けようとする。ボールを落とさない	I play the guitar. →I like music, too. I play the drums.→Really?→Yes. I have some drums

¹ Sakamoto and Sakamoto

	ようみんなで努力する。	at home.→Oh, that's great.→How about you, Aya?
③英語は <u>紹介しあう</u> 文化	➤ 知人を知人に紹介	“Bill, this is my friend Yuki. →Yuki, this is my host mother June.”→“Hi, Bill. Nice to meet you. I've heard so much about you.”
④対等関係での <u>英語的 Politeness</u> の文化（ <u>決定権を相手に譲る²</u> ことで丁寧さを表す）	➤ 人に許可を求める ➤ 相手の意向を聞く	“May I use your telephone?” “Would you like some eggs?”
④ 同上 （ <u>依頼を断りやすくする³</u> ことで丁寧さを表す）	➤ 人に丁寧に依頼する ➤ 命令表現<指示表現<依頼表現 ➤ 現在時制<過去時制	“Could you tell me the way to the castle?” “I will be happy if you can send it very soon.”
⑤ <u>対人的ポジティブ・ストラテジー⁴</u> の文化 （あなたは私にとって良い存在です）	会った時や別れ際の挨拶 何かしてもらって感謝する時	“Nice to meet you.” “It was nice seeing you.” “Oh, this is great! I really like it.”
⑤同上（私はあなたにとって良い存在です）	贈り物をする時の挨拶	“I hope you will like it. Open it.”
⑥積極的に <u>褒める</u> 文化 ⁵	誉める、誉められる	“You speak English very well.”—“Thank you! I'm so glad.” “That's a nice shirt. Where did you get it?”

5. 調査の結果と考察

5.1 教科書によって、言語内在文化の扱いは様々。

	①積極的言語表明	②言語バレーボール	③紹介しあう社会	④英語的ポライトネス	⑤対人 Positive Strategy	⑥褒める文化
A社	2	6	1	7	2	3
B社	3	2	1	5	1	0

² 鶴田庸子

³ 鶴田庸子

⁴ 小林祐子

⁵ 木村和美

C社	8	9	0	44	3	5
D社	33	44	1	43	11	12
E社	9	35	2	25	4	2
F社	10	40	0	17	6	4
合計	65	136	5	141	27	26

5.2 [Will you? /Can you? /Would you?/ Could you?]や [Can I?/ May I?]が、使い分けや背景発想の説明なしに混然と提示されている。また[Could I?]はなぜか提示されていない。→鶴田他を参照

5.3 ①～⑥が、表現としては提示されているが、その根底にある文化（「なぜその表現が望ましいとされているか」）は解説されていない。

6. まとめ

- ①相手の言うことをしっかりと理解する
- ②話し合うことにみんなが協力する
- ③新しい人と建設的に出会う
- ④相手の自由意思を尊重して物事を頼む
- ⑤相手も自分も価値ある好ましい存在だ
- ⑥お互いを褒めよう

6.1 自文化に加えて、こういう異文化の存在を知り、視野を広めることは、日本の教育にとって望ましいことではないか。
もちろん、どの文化を選ぶかは、各人が選べばよいことである。

6.2 英語表現を、単に便利なツールとして教えてゆくよりも、

- その文化的背景を含めて紹介することで→英語学習がより面白くなる
- 文化的行動として体験させてゆくことで→より記憶に定着し、実際場面で活用できる。
-

引用文献

- 木村和美 (2007) 『ポジティブ・イングリッシュのすすめ』 朝日新書
 小林祐子 (1987) 「見事な small talk」『英語教育』1987年1月号. pp.12-13. 大修館
 鈴木孝夫 (1999) 『日本人はなぜ英語ができないか』 pp.97-98. 岩波書店
 鶴田庸子、ポール・ロシター、ティム・クルトン (1988) 『英語のソーシャルスキル』 大修館書店
 松畑熙一 (2002) 『英語教育人間学の展開－英語教育と国際理解教育の接点を求めて』 開隆堂
 Kachru, B.B. and C.L. Nelson. (2001) World Englishes. in Burns, A and C. Coffin (eds) *Analysing English in a Global Context*. New York: Routledge. p. 20.
 Sakamoto, N. and S. Sakamoto. (2004) *Polite Fictions in Collision*. 金星堂